

松 山 大 学 論 集
第 31 卷 第 1 号 抜 刷
2 0 1 9 年 4 月 発 行

神 道 の 行 方

今 枝 法 之

神 道 の 行 方

今 枝 法 之

は じ め に

宗教が衰退している。とくに日本の近年の仏教は退潮の傾向が著しい。江戸時代以降、「葬式仏教」になってほとんどの葬式や法事は仏教が執り行うことになったわけだが、その仏教が現在、急速に衰微している。たとえば、葬祭業者によって一日葬という儀礼を短縮した葬儀ができるようになってきた。一日葬とは、通夜を行わず、家族・親族・友人が集まって告別式と火葬を一日で行う葬儀である。高齢の親族や遠方の知り合いの負担軽減であったり、告別式と通夜の区別がつかない会葬者が多くなったことなどにより、はじめられた葬儀である。一日葬は「近年葬祭業者によって提案された新しい葬儀スタイル」なのである¹⁾。

一日葬以外にも直葬や家族葬といった儀礼を短縮した葬儀が起こってきている。そして、それらとともに散骨、樹木葬、永代供養墓、納骨堂といった新たな埋葬形態も見られる。納骨堂を例として挙げよう。最近、東京などの大都会では土地が高くなり、お墓を買うことが難しくなっている。そのため、恒久的に遺骨を祭祀する施設として納骨堂を使用するようになった。墓の代わりに納骨堂を使って身近な人の霊を慰めるということである。人が死んだら家のお墓、という考え方が絶対的なものではなくなりつつあるのである（最近では納骨堂を永代供養墓として利用したいという要望があり、納骨堂が永代供養墓の役割を果たすようになっている）。散骨や樹木葬もほぼ同様である。散骨は墓を廃止し、粉碎した遺骨を海や山などにまく、というものである。樹木葬は、

墓石の代わりに、樹木を墓標にする葬送である。樹木葬は墓埋法が適用され、墓地として認可を得た土地でないと行うことができないのである。散骨も樹木葬も無宗教の永代供養納骨堂と同じく、脱お墓、そして脱継承の意味合いをもたらしめている。

このように、「葬式仏教」の退潮は明らかに顕在化しているのであるが、神道はどうであろうか。一応、正月の初詣（これは寺社を含む）は人出が多いようである。2019年の人出ランキングによると、1位の明治神宮（約317万人）、5位の伏見稲荷大社（約250万人）、6位の住吉大社（約231万人）、7位の熱田神宮（約230万人）と太宰府天満宮（約230万人）、9位の武蔵一宮 永川神社（約220万人）、10位の宮地獄神社（約200万人）という具合に多くの人々を集めている（2位から4位は寺社なので省略）²⁾ また、もともと関東地方の習俗であった、11月15日に多い七五三なども神社で行っている（ただし、最近では寺社で七五三を行うところもある）。その他、地鎮祭や自動車のお祓い、結婚式や厄払いやお宮まいりなどの儀礼もある。

しかし、神主は基本的に「食べていける職業」ではない。「参拝客の投げる賽銭やお守りなどの《売り上げ》が見込めるのは、観光地にもなっている一部の大神社に限られる。」そして「神社本庁の数字を見ると、神社数こそ7万8,969と膨大だが、教師は2万1,698人しかいない。3.6社に1人の割合でしか神主がいない計算だ。複数の神社の宮司を掛け持ちしても、生活していく収入が足りず会社員などを兼業している」のである³⁾

あるいは、宗教社会学者の石井研士は、「2014年、日本創生会議が『消滅可能性都市は896』と発表した。この市町村にある宗教法人数を調べると、全国の宗教法人の35.6%にあたる6万2,971法人あった。このうち神道系は3万2,867法人（全神道系の40.1%）、仏教系は2万4,770法人（全仏教系の32.7%）。極めて単純に言えば、全宗教法人の3分の1以上は消滅する可能性がある。」と述べている。このように、仏教系と神道系ともにその宗教法人数を大きく減少させてゆくと見込まれている⁴⁾

こうしてみると、将来的に神道も仏教と同じく決して安泰とは言い難い。ゆえに今回は神道の行方を探ってみたいと考えるのである。

一 神道の始まり

神道の始まりはいつからだろうか。岡田莊司によると、「神道」の成立期論はおもに四説あるという。

第一説は「七世紀後半・八世紀，律令祭祀制。天武・持統天皇朝成立説。太政官とともに神祇官が立てられ二官体制のもと律令官社制度が完成する。『神祇令』が制定され，国家の祭祀体制が確立した時期。大嘗祭・伊勢式年遷宮もこの時期に始まる。——これを『神道』の成立と論じる見解は多い」。

第二説は「八・九世紀，平安時代初期成立説。提唱者は高取正男。朝廷における禁忌意識，神仏隔離の成立から『神道』の自覚過程を明らかにし，地域社会に根ざした『神道』の台頭に注目する」。

第三説は「十一・十二世紀，院政期成立説。提唱者は井上寛治。二十二社奉幣と諸国一宮制が成立し，中世的天皇神話や神国意識が地域社会へ浸透していった時期に『神道』の成立を求める。井上寛治は黒田俊雄の影響を強く受けるが，黒田の論じた顕密体制が神祇の存在を過小評価することを批判し，顕密体制下における神祇信仰の発展期を，その成立期とした」。

第四説は「十五世紀，吉田神道成立期説。提唱者は黒田俊雄。顕密体制が解体してゆくなか，顕密仏教の一部であった神祇の存在は，自立し，吉田神道を創出した。顕密体制の終焉とともに，初めて『神道』が成立したとする」。

以上にまとめたうえで，岡田は「第一説の古代律令神祇体系のなかに，神道的要素を抽出することは可能であるので，律令祭祀制を成立の基本に置くことにした」としている⁹⁾。

また，三橋健が監修した書物にも同様な四説の紹介がなされている。①7世紀後半～8世紀説（飛鳥～奈良時代）天武・持統朝に律令制にもとづく神祇祭祀が整備され，全国の神社は朝廷の管轄下に置かれ，天皇を頂点とする神

社・祭祀のシステムが築かれる。② 8～9世紀説（平安時代初期）律令制にもとづく天皇・朝廷を中心とした祭祀制度が確立し、また、神仏習合の流れに抗して神仏隔離が行われ、「神道」が自覚される。③ 11～12世紀説（院政期）律令制は衰退するが、それに代わって合理的な二十二社奉幣制・諸国一宮制が成立し、それによって全国に神話や神国意識が浸透した。④ 15世紀説（室町・戦国時代）神仏習合的な神道説を批判して、独自の教説を唱える吉田神道が成立。体系的な教理を整備して、明確に宗教化した「神道」が登場する⁶⁾。

そして、三橋は「日本の民族的宗教としての『神道』の起源については、さまざまな見解があるが、この語自体が、日本の民族的宗教の総称として一般化するようになったのは、中世以降とみるのが、現在では通説である」という。また、「『神道』の語が日本の民族的宗教の総称として定着したのは」「中世（鎌倉時代以降）からである」としている。このことは「神道というものが、歴史の中で変遷し、形成されてきたものであること、つまり、神道が作られたものであることを、よく物語っている」と述べている⁷⁾。

もっとも、神道の起源については、一つは、「縄文時代に森林で生活した人々の文化、宗教に求める」もの、二つ目は、「稲作の広まった弥生時代に始まる祖霊信仰（祖先崇拝）に置く」もの、さらに「『神道』の起源は鎌倉時代にある」とするもの、という別の三説を挙げて、「神道は精霊崇拝（アニミズム）と呼ばれる縄文時代の祭祀とその中から生み出されたさまざまな文化の流れをひくとする立場」という最初の説をとる武光誠もいる⁸⁾。

とはいえ、M・テーウエンの言うように、「分かり切ったことだが、神道は、時代を超えた日本文化の背景になったというよりもむしろ、ある時点で『成立』した歴史の産物である」と考えたほうがいいだろう⁹⁾。そして、「〈神道〉の歴史の端緒は鎌倉時代にあり、それが結実したのは、室町時代だった」と見ることができる¹⁰⁾。

つまり、「十世紀に、すでになりに衰退していた神祇祭祀と、それにとって代わった仏教的な『神道＝ジンドウ』儀礼と、後期中世に『神道＝ジンドウ』から発展した『神道＝シントウ』との間には、明確な違いがあるのである。」「すなわち、神道は古代の神祇祭祀を直接継承したのではなく、むしろ土着の神々を仏教的な世界に馴化し昇華させる伝統に基づいたものであることが明らかになる。」「この言説が、ある程度以上の独自性、または特殊性をもつようになった時に、『神道＝ジンドウ』の概念化が最終段階に入り、その読み自体が、一つの流派・宗派を特徴づけるものとして『神道＝シントウ』に変えられたのである」とされる。このようにテーウエンによると、① 神祇祭祀 ② 仏教的な神道＝ジンドウ ③ 1419年の神道＝シントウに分けられ、室町時代前期に「神道」概念の画期があったことになる¹¹⁾

以上のように、井上寛司が言うように「古代において、『神道』の語は『シントウ』の読みはもちろんのこと、その具体的な内容においても、まだ日本独自のものをもっておらず、『日本固有の』という意味合いをもつようになるのは中世以後のことと考えなければならない。『神道』の言葉はあっても、その内容が明確なたちで定まっておらず、きわめて漠然としたものであった」のである。つまり、「『^{しんとう}神道』が、日本の古代やそれ以前ではなく中世になって成立し、そしてそれが広く定着したのは、さらに遅れて中世末から近世初頭にかけてのこと」だった。そして、「テーウエンの指摘で私も強く同意するのは、『日本書紀第一開書』になった時期（一四〇〇年前後）を神道流派の登場と関連づけている点である。」「仏教から独立した宗教として『神道』が見えるようになるのは、まさにこの頃」だと伊藤聡は述べている¹²⁾

日本思想史や宗教学の近年の研究を眺めてみると、「神道」の場合、おおよそ1400年頃に「基本的に〈固有〉宗教として自己形成してゆく」ものと思えることができるだろう¹³⁾

二 神 仏 習 合

神道について次に考えてみたいことは、神仏習合である。「神仏習合という現象は、神仏両者が接近し、結合・融合することをいう」。あるいは神仏習合とは「神祇信仰と仏教が複雑なかたちで結合し、独特な信仰の複合体を築いたものをいう」のであるが、始まりは一応、仏教が538年（あるいは548年）に公伝された後、奈良時代（八世紀）の神宮寺の出現以後ということになる¹⁴⁾つまり、神仏習合の時代があつて神仏が発展したのだが、その後、近代において明確に分離し始めたといえる。

さて、神仏習合の始まりは、神宮寺の出現である。神宮寺とは神威の衰えた神を救い護るために神社の傍らにできる寺院である。あるいは、神宮寺とは、地域の神々が神であることの苦しさを訴え、その苦境から脱出するために神の身を離れ（神身離脱）、「仏教に帰依して仏になろうとする神々の願いを実現する場として成立した寺」である¹⁵⁾

神宮寺創設の特徴としては、以下の四点を挙げることができる。(1) 神の苦悩を仏力を加えることによって救い、神威を一段と発揮させる。そのために神宮寺を建立する。(2) この結果として農耕生活の安定（風雨順調・五穀豊穰・疫病除去など）がもたらされる。(3) 神宮寺創建の推進力は地方の豪族層であること。(4) 神宮寺創建に関係した仏徒は、ことごとく山岳修行者（沙弥・優婆塞・禪師など）である¹⁶⁾

各地に神宮寺ができあがると、神前読経、すなわち神の前でお経を読むことが、行われるようになる。神は仏法を悦ぶと考えられるようになり、必然的に神は読経も悦ぶものと考えられたとののである¹⁷⁾ また、神宮寺には本尊をはじめとする仏像が安置されるが、同時に神像も安置されるようになる。仏教の仏の像から影響を受け、これまでになかった神像が出現したのである¹⁸⁾

このように、「日本各地に、他国に類例を見ない、神社（基層信仰）と寺院（普遍宗教）が正面から結合し、仏になろうとして修行する神（菩薩）のため

の寺」という形の神宮寺が生まれてくる。そして、それは「宗教の構造が、基層信仰（神祇信仰）と普遍信仰（仏教）の完全に開かれた系での複合体」という形で展開してゆくのである¹⁹⁾

その次に見ておきたいのが、本地垂迹説である。「本地とは、物の本源、本来の姿をいい」、「仏や菩薩の本来の姿のこと」である。したがって、「本地垂迹説とは本厳としての仏や菩薩が、人間を利益し、衆生を救うために、^{りやく}迹を諸方に垂れ、神となって形を現わすという説」ということである。いいかえると、本地垂迹説とは「菩薩・諸天が神と化して跡を日本各地に垂れて現れるという意味で、具体的には、日本各地の神社に祀られた神々を、仏教の神仏が仮の姿をとって現れたものと理解するもの」であり、「平安中期に擡頭し、平安後期から中世を通して日本を覆った、仏教側からの神祇信仰抱き込みの教説体系である」²⁰⁾

本地垂迹説は「神の側から仏に近づくのではなく、仏自体が積極的に神の世界に侵入して仏の化身とみずからを位置づけるというもので」あったのであり、「仏教が優位に立ったうえで、そのイニシアチブで神祇の世界のすべてを包摂・統合していこうとする積極的な論理」なのである。それによって、「仏教界は王権と世俗世界にむけて、仏の世界が神祇の世界の上位に立つことを最終的・決定的に論理化することに成功した」のであった²¹⁾。このように、「仏が根本（本地）で、神は仏が仮の姿で現われた（垂迹）ものである」とする本地垂迹説が生み出されていった。そして、「名実ともに仏教が習合の主導権を握った」のである²²⁾

しかしながら、元寇以降は神国思想が明確に台頭してくるのであり、神の優位が説きはじめられるようになる。そこで「神こそ本地であり、仏は神が仮の姿になって現われたものであるという考え方が」起こってくるのである。すなわち、反本地垂迹説が生まれてくる²³⁾。中世になると神国思想の高まりと呼称しながら、神の優位が説き出される。そして、「神仏関係にも逆転が生じて、神本仏迹を説く神道論が現われ、反本地垂迹説」になったのである²⁴⁾

さて、ここで付け加えたいことがある。それは社僧（もしくは別当）の存在である。社僧とは神仏習合の時代に神宮寺において仏事をつかさどった僧のことである。「神宮寺建立とあわせて、神前で経典が読経されたり、写経が神社に奉納されたりするようになった。これを仏法の楽しみを信受させるという意味で『法楽』という」²⁵⁾

社僧は別当、検校、勾当、専当、執行など多くの職階からなる僧侶からなり、神官は別当を長とする僧侶の支配をうけた。また、社僧は半僧半俗であり、妻帯を許された。平安時代以は、全国の諸社に社僧が置かれるようになったが、明治の神仏分離令により、その制度は廃止されたのである²⁶⁾

神宮寺に所属し、神々のために仏事を行った僧侶である社僧とともに、山岳宗教者の修験者や山伏も忘れてはならない。出羽三山などは、明治の神仏分離以前は「非常に仏教色の濃い神仏習合、すなわち修験道の聖地であり、行事や祈禱は仏教的な様式で行われていた」のである。また、「英彦山、熊野、白山などのように山岳信仰と強く結びついた修験道の聖地」は、「中世から近世にかけては」、「仏教化した神である権現を祀る、きわめて仏教色の濃い神仏習合の霊場として栄えていた」のである。つまり、「修験者や山伏たちは、社僧と並ぶ神仏習合の重要な担い手」だったのである²⁷⁾

社僧や修験者や山伏が存在し、神宮寺や山岳霊場が機能していたということは、神仏習合は明治時代に至るまで続いていたといえよう。ただし、現代において、本論文の「はじめに」で見たように、初詣は（後で述べるように、それは近代の新しい習俗であるが）神社以外に寺院でも行われている（ちなみに、2019年度の第2位が成田山新勝寺、第3位が川崎大師平間寺、第4位が浅草寺である）²⁸⁾ また、すでに述べたように、七五三は神社のみならず寺院でも行われている。すなわち、現代においてもなお、1868年に神仏分離令が出されたにも関わらず、民間レベルでは、神道と仏教は完全に分離しているとは言い難い。神仏習合は庶民信仰のレベルにおいて、いまだ残存しているといえるのである²⁹⁾

三 儒家神道と復古神道とその後

近世の到来において、封建制を思想面から理論づけたのは儒学とりわけ朱子学であった。朱子学は封建社会のあらゆる面から仏教を追い出してゆく。神道からも仏教が追い払われ、神道は儒教と習合してゆく。林羅山・吉川惟足・山崎闇斎らによって、神儒習合による神道論が成立するのであった³⁰⁾

林羅山は儒学者として徳川將軍家に仕え、みずから「理当心地神道」を唱えた。それは神道理論を儒学によって構築したもので、「儒家神道」の濫觴である。羅山の神道論の前提となっているのは、神道と儒教は同じ宇宙万有の原理（理）から発生したという神儒合一論である。つまり、神儒一致の視点から提唱したのが理当心地神道だったのである。理当心地神道とは「神＝心＝理と考えることを基本とし、個人の心や行いを正しくするだけでなく、神の徳や力によって国家に王道政治をもたらし神道だ」ということである³¹⁾

羅山はまた、三種の神器しんじんの神璽・剣・鏡はそれぞれ仁・勇・智の三徳を象徴していると理解した。「三徳の象徴である三種の神器を天皇が伝承していることは、神道が、儒家の仁徳にもとづく政治「王道」と原理を同じくしていることを証明している」と論ずる。すなわち、「羅山は、神道の実践とは王道の実践であると説き、神道がめざすものは、すなわち儒教的徳治主義にもとづく王道政治である」としている。

羅山に特徴的なのは、仏教色を徹底的に取り払っていることである。日本の神道と中国の儒教は本来同一のものであり、仏教はそうではないので排斥されるのである。また、羅山は朱子学における理（万物の根本原理）と気（理から派生する個々の物質的特性）の関係を、神道に当てはめて、儒教と神道がいかに共通しているかを述べた上で、そこから外れる仏教を批判している（具体的には、神道の神は、朱子学の理だと解釈されている）。このように、羅山は仏教を外道とし、神仏習合思想を激しく否定したのである³²⁾

次に山崎闇斎についてである。山崎闇斎は垂加神道という独自の神道説を唱

えた。「垂加」とは、「天照大神の神勅『神かみの垂しは祈禱ねぎごとを以て先とし、冥くらきの加ますは正直ますぐを以て本とせり』(『倭姫命世記』やまとひめのみことせいほか)から採られたもので、一心不乱に神を祈り、正直な心を常にもつことを求める、神道人としての基本的な教え」を示している。闇斎は自身の霊社号を『垂加』とした。よって、闇斎の神道説を「垂加神道」と呼ぶ。闇斎は朱子学と神道を併せて研究することを道德的な道であると主張した。彼は神儒一致の立場から垂加神道を創唱し、仏教を排撃したのである。³³⁾

垂加神道の教説に「土金どこんの伝でん」というものがあるが、「土がしまって金になるように、心身を緊張した状態に保持すること、つまり『つつしみ(敬)』こそが、人間の生き方の基本であるという」。闇斎は「神道の宗源は土金にあり」と述べている。³⁴⁾

闇斎はまた、「革命を否定し、君と臣とは、君臣合体の境地に達するまで相互に努力せよ」と説いた。そして、「君臣関係とは、天皇と臣・民との関係であり、永遠にその関係は不変でなければならない」とした。すなわち、「天皇が不徳ならば有徳の皇子に代えることも可とする儒家的な革命論を否定し、君(天皇)の地位は絶対不変であるとしつつ、君と臣とは君臣合体の境地に達するまで相互に努力すべきである」と論じた。

垂加神道は、神職のみならず、公家・武士に広く伝わった。そして、国学や復古神道が興隆する江戸時代半ばまでは、神道界において強い影響力を保持したのであった。³⁵⁾

さて、江戸時代中期になると、「日本の文献によって、日本独自の思想や精神を考究」する人々が現れるようになった。その学問は「日本の史書や古典文学を精密な文献考証によって客観的に研究しよう」という、いわゆる国学である。国学者は「神道も研究の対象とし、『古事記』『日本書紀』を古書に即して学び、仏教・儒教じゅきょう・道教などの外来思想からごころ(漢意)の影響を受ける以前の『古道どう』を明らかにしようとした」。この国学を基礎とした神道を広い意味で復古神道と呼んでいるのである。³⁶⁾

国学者は荷田春満・賀茂真淵・本居宣長・平田篤胤らに代表されるのであるが、彼らの研究領域は神道にとどまることなく、語学・国史・国文・法制・考古学などと幅広かった。ここでは本居宣長・平田篤胤を扱うことにしたい³⁷⁾

本居宣長の代表的な著作は、『古事記伝』であるが、その中でわが国を地上のどこよりも尊貴であるとして、「皇大御国」と名付けた。その理由としては、はじめは地上のあらゆる場所で誰もが日（日神の天照大御神を指す）の恩恵を感謝していたが、時代が下ると異国ではその恩恵よりも儒教や仏教といった教えを貴ぶようになった。そうした国では人の道から離れた考えや行いが現れ、世が乱れていった。それに対し、「わが国のみ神代から現在に至るまで変わらず、その恩恵を貴び感謝してきたので、異国のような人の道から離れた革命などに見られる世の乱れが起こらなかった」と主張した。

そして宣長はこうした日の恩恵を尊び感謝してきた古代人の生き方を古道あるいは「神の道」と呼んだ。「神の道」は伊耶那岐命・伊耶那美命から天照大御神へ伝わり、そしてその御子である歴代の天皇に伝えられてきたお陰で、現在も変わることなく、誠の道として伝わっていると考えた。しかし、日本人といえども時代とともに「漢意」に惑わされて「神の道」を見失ってしまった。そこで、それを再び日本人に蘇らせることが、古学の目的であると説いたのだ。言い換えれば、見失われた「神の道」を再び甦らせるのが、古道であり国学である、ということである³⁸⁾

宣長の生前は直接教えを請うことができなかったものの、没後の門人として正統的後継者となったのが、平田篤胤であった。古道方面における篤胤の代表作が幽冥界を論じた『霊の真柱』である。

まず、古学（古道）を学ぶ者は、何よりも大和心を固めなければならない、そのためには、死後の靈魂の行方を明らかにすることが根本であるとする。靈魂の鎮まりゆくところを知ろうとするならば、まず天地を天地たらしめて神の功德をよく知り、さらに日本が万国の本の国であり、万事において万国に優れた国である所以を知る必要がある。そして、顕明（目に見える世界）は天照

大御神の子孫である天皇が、幽冥（目に見えない世界）は須佐之男命の子孫である大国主神が主宰するという真理を知らなければならず、俗に言うように死者の霊は地獄や極楽、黄泉国に行くのではなく、大国主神が支配する幽冥界に行くことを明らかにした。

本居宣長は人が死ねば黄泉へ行くのだから、死ぬことは実に悲しいのだ、と考えたのだが、平田篤胤は人は生きては天皇が主宰する顕界（目に見える世界）の御民となり、死ねば大国主神が主宰する幽冥界（目に見えない世界）の神となって、おのおのの主宰者に仕えまつると考えた。しかも、その幽冥界は、決して他界ではなく、ただ目に見えないだけであるという。幽冥界から顕界が見え、そこから神は君や親そして子孫を見守っていると説いた。

篤胤は仏家神道、儒家神道、吉田神道を「俗神道」として退け、真の神道は古道であるとした。篤胤の神道説は復古神道の主流となり、幕末の思想界に大きな与えたのである³⁹⁾

さて、明治時代以後はいわゆる「国家神道」が誕生した。国家神道とは「明治維新以降、天皇崇拝と神社神道（神社祭祀を中心に展開される神道）が組み合わせあって、国家と強く結びついて発展した神道」といえる⁴⁰⁾。そして、国体論と国家神道の関係についていえば、国体論と国家神道とは必ずしも同じではない（「国体」という語は、中国の古典に由来しているが、「近代に入ると、『日本固有の、天皇中心の国のあり方』の意味」だとされる）。しかし、「両者に多分に重なり合うものがあったのは」確かであり、「明治維新以降の国家神道的な流れを集約し、神や神社ではなくあくまでも天皇を中心にまとめあげようとした神道の言説が、国体論だった」のである⁴¹⁾

戦後になると、GHQ（連合国軍総司令部）は日本政府に対して「神道指令」を出した。国家による神道への支援の禁止、神祇院の廃止、公教育からの神道教義の削除など、国家神道の廃止を命じたもので、第二項には「本指令の目的は宗教を国家より分離するにある」と記されている。そして、この指令は、国家から分離された神道を「神社神道」と呼び、神社神道は個人の宗教として存

続することを認めた。敗戦をへて、神道は全面的な解体と出直しを迫られることになったのである⁴²⁾

四 結 語

ここまで神道の歴史をたどってみたが、神道の行方はどうなるのであろうか。ただ、今後の神道の行方を論じる前に、明治時代の神仏分離令などによって新しい神道が出来上がってきたことを明らかにしたい。

まずは、皇室の「お黒戸」が宮中に存在したことである。江戸時代の皇室は神道だけでなく、仏教の信仰も実践されており、宮中には「お黒戸」と呼ばれる仏間があった。そこでは歴代の天皇や皇后の位牌が祀られていた。天皇家の菩提寺は京都の泉涌寺で、天皇や皇族が亡くなった時には泉涌寺の僧侶たちが葬儀を行っていた。天皇は間違いなく仏教を信仰していたのである⁴³⁾

明治になって、このお黒戸は宮中から追いやられ、泉涌寺に移されることになる。そして、宮中には、新たに賢^{かし}所^{ところ}、皇^{こう}霊^{れい}殿^{でん}、神殿からなる「宮中三殿」が設置され、そこでは天皇を中心として祭祀が営まれるようになったのである。天皇は、明治以降、宮中祭祀を司ることを重要な役目としている。しかし、宮中三殿自体、天皇が京都にいた時代には、京都御所のなかになかったものであった。古代からの伝統をもつようにも見える宮中三殿の歴史は浅く、明治の新たな神社制度の賜物なのだった。宮中三殿で執り行われた宮中祭祀の多くは、明治以降に制定された祭典だったのである。

明治以前の宮中祭祀と明治以降の宮中祭祀を比べてみるとはっきりとした違いがある。それは天皇家の祖先を祀る祭祀や、紀元節のような日本の国の始まりに関わるような国家的な祭祀が含まれるようになったことである。そこには、天皇家の祖霊を神格化し、天皇自身をそれにつらなる現人神として信仰の対象にしようとする意図が働いていた。日本の歴史を振り返ってみると、お黒戸の移設や宮中三殿の祭祀も、ともに伝統的なものではなく、全く新しいものだった⁴⁴⁾

次に初詣である。先述したように、じつは初詣は二十世紀の近代的な習俗なのである。「江戸時代は元日に出歩かず、『恵方』（縁起のよい方角）から来る神を家で静かに迎える地方が多かった。『初寅^{はつとら}』など、各寺社の祭日に参拝する習慣もあった」のである。それに対して「宮中には、天皇が元日に神々に五穀豊穡と天下太平を祈る『四方拝』という神事があった。明治維新以降、まず、官公庁や学校がこれに連動して元日に儀式を行うようになる。恵方参りも元日に行く人が増える。…こうして、国家神道で高く格付けされた『官幣社』に参詣者が集中、元旦の『初詣で』が一般化した」のである⁴⁵⁾

すなわち、江戸の正月元日は、「家にこもって、やってくる歳徳神を、家の歳棚で迎えるのが基本であった」。つまり、「近世の正月は家の中で静かに、恵方からやってくる歳徳神を迎えるものだった」のである。しかし、それが変化してゆくのである。「近世朝廷にあった正月元日の特別の意味が、明治二十年代に宮中の新年拝賀と連動した、官公庁への拝賀と学校教育の新年節を媒介として社会に浸透してゆく。かくして正月元日に官国幣社を中心とする神社へ出向き祈る、初詣が成立する」のである。そして「この初詣が都市から農村をも含む社会全般へと広まり、国民的な神道儀礼となってゆくのである」⁴⁶⁾

おおまかな流れにおいては、二十世紀になって初めて「家で歳徳神を迎える正月から、外に出向き神仏に詣でる正月へ」と変化しているのであり、初詣はまさに「近代に創出された神道儀礼」なのである⁴⁷⁾

第三は拍手である。「現在の感覚では、二礼二拍手一礼が昔からの神社の伝統であるかのようにとらえられているかもしれない。だがそれは、明治になって行われるようになった新しい作法であり、それ以前は合掌するだけだった。それは、現在の私たちが仏教の寺院を訪れ、本尊などを拝むときに行うやり方と変わらない」。神仏習合の時代であったゆえにそれは当然のことである。「神と仏、神社と寺院を区別することができない時代には、神道式の拝礼と仏教式の拝礼が区別されることはなく、合掌が基本だったのである」⁴⁸⁾

つまり、昔の神社や寺院を参詣する人々は「皆、合掌している。神社の社殿の前であろうと、寺や仏堂の前だろうと、まったく同じで、拍手を打っているような人の姿はまったく見かけない。」「今日神社での正式な参拝の仕方とされているものは、明治になってから定められたものだ。したがって、近世までは、拍手を打つやり方は存在しなかった。…（中略）…今のやり方は、…（中略）…比較的新しいものなのだ」⁴⁹⁾

第四は、神仏分離政策における社号と祭神の変更である。たとえば、寺社と神社が結合していた京都の祇園社は、八坂郷にあったことから八坂神社と改称された。「祇園」が「祇園精舎」にちなんだ仏教的な名称だったので、改められたのである。祭神は牛頭天王から素戔鳴尊に改められた。また、江島弁天（江島明神）は江戸時代には与願寺とも称し、弁財天像を本尊兼ご神体としていた。しかし、神仏分離令で江島神社と改称し、三重塔などの仏教施設は破壊され、祭神は宗像三女神（田心たごり姫ひめ神・湍津たぎつ姫ひめ神・市杵島いちきしま姫ひめ神）に改められた。琵琶湖ちくぶしまの竹生つくぶす島弁天は都久夫須麻神社と改称され、祭神は宗像三女神と定められた。このように、全国の弁天社には明治維新の神仏分離令によって宗像神を祀る神社に姿を変えたところが多い。

この他にも、地方の小さな神社は、仏像をご神体として、山の神、地主神などを祀る民俗信仰的な神社が多かったが、山の神→大山おおやまつみ祇神、地主神→大国おおくに主神・少彦すくなひこ名神といったふうに祭神が改められ、仏像は撤去されて新たなご神体が指定された。このように神仏分離にともなう神社の祭神の変更は、建前は神仏習合前の祭神に戻すという形だったが、現実に行われたのは、記紀神話や『延喜式』『神名帳』によって権威づけられた特定の神々に信仰対象を転換するという作業だった。そして、今日の神社の多くは、明治の神仏分離によって祭神が変更されていて、現行の社号や祭神としての歴史は、浅いのである⁵⁰⁾

以上のように、「『伝統』と言われるものはかなり怪しい」のであり、「日本人の神とのかかわり方は、明治に入った時点で、根本的な変化を被ったと言うことができる」のである⁵¹⁾ 明治以降の神道はそれ以前の神道（神仏習合）と

はかなり異なったものであるといえる。そして、その歴史の浅い明治以降の神道が徐々に衰退しつつあるといえるのである。

そこで、最近の一般の神社の年収がどうなっているかを見ておきたい。資料として、2016年に公開された神社本庁編『「神社・神職に関する実態調査」報告書』が存在する。それによると、年収が三百万円未満の神社が六十一・一八パーセント、三百万円以上一千万円未満が十八・四パーセント、そして一千万円以上が十六・二パーセントである。次に宮司本人の年収はどうかというと、三百万未満が六十・四一パーセントで五百万円未満とすると七十九・一パーセントである。ようするに、ほとんどの神社の収入はつつましいものであり、それが一般的な神社のおかれた状況なのである。

そもそも、神社の神職は戦前は官吏（国家公務員）だった。神職が官職だったので、戦前は「神官」とも呼ばれていた。しかし、戦後GHQが発した「神道指令」によって、神職を官吏として待遇することができなくなった。これに加えて「農地改革」によって、地主が小作農に貸し出していた農地が買収され、小作人にただ同然で売り渡されたのだが、神社も小作地を奪われたのである。

ただし、小作地を奪われたのは地方の農業地帯にある神社だけである。都会の神社にはもともと小作地がなかった。したがって、都市にある神社と地方にある神社の間に格差が生まれた。ただ、都会の神社でも、経済的に苦しくなり、境内地にマンションを建てることで、その危機を乗り越えようとしているところもある。都会の神社でもこうした事態に陥っているわけだが、地方の場合、神社を維持するための方策をまったく見出だせないのである。地方の神社は消滅の危機を迎えているといえる⁵²⁾

もちろん、神社の衰退が神道の崩壊を意味しているわけではない。しかしながら、本論文の「はじめに」で見たように、神道系と仏教系ともに宗教法人の3分の1以上が消滅する可能性があるのである。神道系であれ、あるいは仏教系であれ、宗教法人数がゆっくりと衰微してゆくことは疑いがないであろう。

注

- 1) 一日葬なび 一日葬 (<http://www.1-sogi.com/about.html>)
- 2) 初詣人出ランキング 初詣特集 2019 (https://sp.jorudan.co.jp/newyear/rank_visitor.html)
- 3) 小川寛大「神主は食べていけない」AERA 2017, 1, 16 No.3 17頁
- 4) 朝日新聞「寺社の未来は 宗教法人 3分の1消滅する可能性」2016年1月16日 土曜日
- 5) 岡田莊司(編)『日本神道史』吉川弘文館 2010年 14～17頁
- 6) 三橋健(監修)『神道に秘められた日本史の謎』洋泉社 2015年 21頁
- 7) 三橋健(監修)『神道に秘められた日本史の謎』17～19頁
- 8) 武光誠『神道——日本が誇る「仕組み」』朝日新聞出版 2014年 23～24頁
- 9) M・テーウエン「神道と神道の成立についての比較考察」『日本思想史研究』第42号 2010年 3頁
- 10) M・テーウエン「神祇, 神道, そして神道-〈神道〉の概念史を探る-」『文学』9-2 2008年 249頁
- 11) M・テーウエン「神祇, 神道, そして神道-〈神道〉の概念史を探る-」254頁
- 12) 井上寛司『「神道」の虚像と実像』講談社 2011年 17頁 63頁 及び 伊藤聡『神道とは何か』中央公論新社 2012年 282頁
- 13) 伊藤聡『神道とは何か』283頁
- 14) 遠日出典『八幡神と神仏習合』講談社 2007年 51頁 及び 義江彰夫『神仏習合』岩波書店 1996年 6頁 及び 遠日出典『神仏習合』六興出版 1986年 50頁
- 15) 遠日出典『八幡神と神仏習合』43頁 及び 義江彰夫『神仏習合』12頁, 14頁
- 16) 遠日出典『神仏習合』53頁
- 17) 遠日出典『神仏習合』58～59頁 及び 遠日出典『八幡神と神仏習合』51頁
- 18) 遠日出典『神仏習合』83頁
- 19) 義江彰夫『神仏習合』26～27頁
- 20) 遠日出典『神仏習合』97頁 及び 義江彰夫『神仏習合』167頁
- 21) 義江彰夫『神仏習合』169頁
- 22) 遠日出典『神仏習合』109頁
- 23) 遠日出典『神仏習合』173頁
- 24) 遠日出典『神仏習合』184頁
- 25) 新谷尚紀(監修)『神社に秘められた日本史の謎』洋泉社 2015年 83頁
- 26) 社僧とは コトバンク (<https://kotobank.jp/word/%E7%A4%BE%E5%83%A7-76024>)
- 27) 新谷尚紀(監修)『神社に秘められた日本史の謎』116～117頁
- 28) 初詣人出ランキング 初詣特集 2019 (https://sp.jorudan.co.jp/newyear/rank_visitor.html)
- 29) じつは、現在でも神宮寺は存在しているのである(ウィキペディアによると日本に50ヶ所以上ある)。その代表的なものの一つが若狭神宮寺である。遠日出典『八幡神と神仏

習合』55～57頁

30) 遠日出典『神仏習合』183頁

31) 三橋健(監修)『神道に秘められた日本史の謎』110頁 及び 揖斐高『江戸幕府と儒学者』中央公論新社 2014年 70～71頁

32) 三橋健(監修)『神道に秘められた日本史の謎』112～113頁 及び 鈴木健一『林羅山』ミネルヴァ書房 2012年 146～147頁

33) 三橋健(監修)『神道に秘められた日本史の謎』119～120頁 及び 岡田莊司(編)『日本神道史』206頁 及び T・カースリス『神道』筑摩書房 2014年 180頁 及び 小島毅『朱子学と陽明学』筑摩書房 2013年 74頁

34) 三橋健(監修)『神道に秘められた日本史の謎』120頁

35) 岡田莊司(編)『日本神道史』207頁 及び 三橋健(監修)『神道に秘められた日本史の謎』121頁

36) 三橋健(監修)『神道に秘められた日本史の謎』130頁

37) 岡田莊司(編)『日本神道史』208～209頁

38) 岡田莊司(編)『日本神道史』212～213頁 及び 三橋健(監修)『神道に秘められた日本史の謎』133頁

39) 岡田莊司(編)『日本神道史』215頁 及び 三橋健(監修)『神道に秘められた日本史の謎』136～137頁

40) 三橋健(監修)『神道に秘められた日本史の謎』158頁 明治維新後、神道の国教化が進んだが、その場合の「神道」とは、皇祖神アマテラスと天皇への崇敬を核にしたものだった。アマテラスを祀る伊勢神宮を頂点として、全国のあらゆる神社をピラミッド型に再編するシステムが目差されたのである。しかしながら、アマテラス崇敬を必要としない信仰集団も深く根を下ろしていた。

明治九年には、神道黒住派(後の黒住教)と神道修成派が神道事務局から独立した。こうして生まれた神道宗派を「教派神道」と呼ぶ。これは国家公認の非アマテラス系神道集団である。その後も、神道系教団の独立は行われ、明治四十一年には天理教も認可を得て、全部で十三派の教派神道が誕生した。すなわち、黒住教、神道修成派、出雲大社教、扶桑教、実行教、神習教、神道大成教、御嶽教、神道大教、禊教、神理教、金光教、天理教の13の教団である。

このように、神道は布教・教化を中心とした「宗教」、つまり教派神道と、天皇崇敬と神社祭祀を中心とする「非宗教」、すなわち神社神道(国家神道)、の2つに分離されたのである。

cf. 三橋健(監修)『神道に秘められた日本史の謎』152～155頁 及び 島田裕巳『神道はなぜ教えがないのか』KKベストセラーズ 2013年 202頁 及び 新谷尚紀『神社に秘められた日本史の謎』162頁

41) 三橋健(監修)『神道に秘められた日本史の謎』172～173頁

- 42) 三橋健（監修）『神道に秘められた日本史の謎』181 頁
- 43) 島田裕巳『神道はなぜ教えないのか』189 頁 及び 島田裕巳『神も仏も大好きな日本人』筑摩書房 2011 年 196 頁
- 44) 島田裕巳『神道はなぜ教えないのか』189 頁 及び 島田裕巳『神も仏も大好きな日本人』193～194 頁 及び 新谷尚紀（監修）『神社に秘められた日本史の謎』158～159 頁
- 45) 朝日新聞「ニッポンの面 其の壺」2008 年 1 月 6 日
- 46) 高木博志『近代天皇制の文化史的研究－天皇就任儀礼・年中行事・文化財』校倉書房 1997 年 253 頁 257 頁
- 47) 高木博志『近代天皇制の文化史的研究－天皇就任儀礼・年中行事・文化財』254 頁
- 48) 島田裕巳『「日本人の神」入門』講談社 2016 年 234～235 頁
- 49) 島田裕巳『神も仏も大好きな日本人』筑摩書房 2011 年 187 頁
- 50) 新谷尚紀（監修）『神社に秘められた日本史の謎』152～155 頁 なお、明治維新によるその他の社名・祭神の変更事例としては、仁王護国寺 [宮崎]→鵜戸神社 鵜戸山権現→ウガヤフキアエズ命、大山寺 [鳥取]→大神山神社奥宮 智明権現→大己貴神、金毘羅大権現 [香川]→金刀羅宮 金比羅大権現→大物主神、祇園感神院 [京都]→八坂神社 牛頭天王→素戔鳴尊、妙楽寺 [奈良]→談山神社 談山大明神→藤原鎌足、金精明神 [奈良]→金峯神社 金精明神・蔵王権現→金山毘古神、白山本宮 [加賀]→白山比咩神社 白山妙理権現→菊理媛尊・伊弉諾尊・伊弉冉尊 などがある。
- 51) 島田裕巳『神も仏も大好きな日本人』188 頁 及び 島田裕巳『「日本人の神」入門』235 頁
- 52) 島田裕巳『神社崩壊』新潮社 2018 年 63～80 頁